【優秀賞】

「解決への道」

七飯町立七飯中学校
３年　小柳　敦駕

北海道の右上には北方領土という歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島からなる地域があります。

一九四五年の八月一四日に日本は「ポツダム宣言」を受け入れ降伏、太平洋戦争は終結したと思われていました。しかし、それが発端となり、ロシア軍が北方領土に上陸、さらに南下を続け、九月五日に全域を占領してしまいました。日本は「北方領土は我が国固有の領土である」という主張をしていますが、対するロシア連邦は「ロシアの領土である千島列島には、この北方四島も含まれている」と主張し、話は平行線のまま、戦後七七年たった今でも解決には至っていません。

この島々が水産資源の宝庫であること、領土となった場合、国家間の安全保障条約によって国防の問題が出てくることなどが、よりいっそう解決を難しくしているようです。

昨年、学校の総合学習の時間に北方領土問題を学習する機会がありました。そして、その学習の一環として「ジョバンニの島」という映画を鑑賞しました。終戦直後の北方領土で、生きていることの幸せを感じながらも、自分の故郷を追われるということ、全てを失っていく途方もない不安。主人公やその家族が立ち向かわねばならなかった現実に、胸が苦しくなったのを覚えています。自分たちには考えも出来ないくらいの苦労をされてきた元島民の方々のことを思うと、この問題を解決できないでいる現状を、もっと自分のことのように捉えるべきだと感じました。

北方領土問題の解決には、日本とロシア連邦それぞれの考え方・主張の違いを乗り越える必要があります。「降伏」と「終戦」の考え方の違い、国際法の解釈の仕方、水産資源に代表される島の活用方法、それぞれの島民に対する生活の保障など、交渉しなければならない問題はたくさんあります。両国どちらにとっても納得できる平和的平等を見つけるためにも、いつでも対話が出来るように準備をしておくことが大切なのではないでしょうか。

残念ながら、ここ数年はコロナ禍によって対面会談が出来なかったことや、ロシア・ウクライナ情勢によるロシアとの関係悪化もあって、交渉すること自体が出来ていません。難しいことかもしれませんが、友好関係を築くための積極的な働きかけが、今まで以上に必要になると思います。

前述した「ジョバンニの島」の中で、もう一つ印象的だったことがあります。それは、主人公やその弟と、ソ連軍兵士の娘の三人が、友情を育んでいく姿です。お互いを知ることによって、少しずつ気持ちが近付いていく様子を見て、これこそが今の日本とロシアの双方が持つべき態度だと思いました。お互いの主張は分かりますが、相手のことを否定したり、お互いを責めてばかりでは何も進みません。お互いの国の背景、歴史、文化を尊重しながら、どうすればこの問題の解決になるのか、元島民・現在の島民双方が幸せになるのかを考えていくことが大切だと思います。

北方領土は長い間解決に至っていない、大きな問題です。両国間の政治的な背景もありますが、何よりも、元島民の方々の、自分たちの大切な故郷を想う気持ちに寄り添いながら、解決への道を探していきたいと思います。